各隊の観測報告

ジョクジャカルタでの皆既日食観測

自主グループ（ジャワ）　山下俊樹

今回のインドネシアでの日食は、大日食であることに加え、乾季であることも大きな魅力だったと思います。われわれは秦先生リーダーのもとに自主グループとして参加致しました。グループは約４０名。その中には、武石先生や佐藤先生達の大ベテランの方々も多くみえる、ユニークなグループがつくられました。

観測地ジョクジャカルタへ着いたのは日食の日の２日前でしたが、その２日間共に、時折雷もまじる激しい雨の降る天気です。日本出発の直前に、今年は雨期が長びいているときききましたが、不安な予感が的中したかのような状態です。

日食前日、ホテルに近い２、３の観測候補地があげられました。観測機械の設置準備に時間の余裕が必要で、なるべく近くを希望する人達も多くみえました。けっきょくホテルから5,６００ｍはなれた田んぼの中に決まり、夜には雲もうすらいだため、ケンタウルスαの南中から南北線を決められたりしました。

日食当日の朝は、しかしかなりの雲でした。一部の人達は気象観測などの目的でホテルの敷地内に残られましたが、大部分は、７時ごろから名物のベチャで、あるいは徒歩で観測場所へとむかいました。視界は広く、北には火山もみえるところで、あぜ道の広がったところに200ｍほどの長い望遠鏡の列ができました。携帯用とはいえない大きな望遠鏡、あるいは新製品のＥＤレンズの望遠鏡、６×７のカメラも何台かあるなどで、ニューカークの人、連続写真の人など、それぞれの工夫の結晶が豪華に並びました。

地元の若者達はバイクで乗りつけたりして、興味深げにあつまってきました。この人達とのコーラスも、望遠鏡の群の中から湧いてきました。

第１接触後、次第に欠けていく太陽は、晴れ間から見えたり、雲のベールをかぶったりでしたが、皆既がかなり近づいたころ、太陽の前にかかった雲がほとんど動かず、一時は絶望的でした。しかし金星が見えだしてすこしたった時、太陽の前の雲はうそのように消え、間もなくうっすらとコロナが見えはじめました。歓声の中、ダイヤモンドリングが、そしてコロナが見事な流線があらわれました。すぐそばに火星も光っています。コロナが見えはじめるのも比較的はやく、ダイヤモンドリングも割に長く、そしてコロナの流線は今回最も鮮明にみえた方だと、私個人の感覚では思えました。また皆既が長く、中心線近くの割にはあまり地上は暗くなかったように思えましたが、これは主観的なものです。本影すいは見えませんでした。あざやかなプロミネンスの中に、再びダイヤモンドリングで皆既は終りました。そして、第４接触までの間、また時々雲がかかりましたが、皆既中には家に戻っていたのであろう地元の子供達も

また増えてきて、ブンガワン・ソロの合唱もおきるなごやかな中に、日食は完了しました。